

『ユメリリ ㇿ 幼なじみカップル観察日記 ㇿ』

特典シナリオ台本

【登場人物】

葉月ユメ（はづき ゆめ）（18）

大学一年生。リリとは小さい頃からの幼馴染み。

高校の時にリリに告白しお互いに気持ちを確認しあったが、受験勉強に集中するために

「付き合うのは大学生になってから」という約束を二人でした。

無事大学に合格し、晴れてリリと恋人同士に。

今まで我慢してきた分、積極的にリリと距離を縮めようとする。

察するよりもはっきり言いたい。追われるよりも追いたいタイプ。分け隔てなく付き合えるため交友関係は広い。

《年齢》18歳 《身長》156センチ

《血液型》B型 《バスト》D

城咲リリ（しろさき りり）（18）

大学一年生。ユメとは小さい頃からの幼馴染み。

どちらかというところボーイッシュだったリリにとって、

ユメはオシャレで可愛く、憧れの存在であった。

クールビューティー感のある見た目から女の子ファンも多い。

ユメの助言により髪を伸ばし始める。（大学デビュー）

本人は恥ずかしがり屋で、ユメのアピールにうまく追いついていけない。

《年齢》18歳 《身長》162センチ

《血液型》A型 《バスト》C

【あらすじ】

葉月ユメと城咲リリは付き合いだてのカップル。

大学生になって晴れて恋人同士になったものの、

幼馴染の期間が長かった二人は、

「恋人」としてどう振る舞っていいのか戸惑う日々。

積極的に距離を縮めようとするユメと、

ユメのアプローチに恥じらいを隠せないリリ。

これは二人がゆっくり恋を育んでいく様子を

ぬいぐるみや観葉植物などの視点から、

ひそかに見守る百合観察音声作品です。

【Scene01：ブルーム・マインド -ぬいぐるみ視点-】

▼ユメの部屋（昼）

・ユメの部屋にある「ぬいぐるみ」の視点。

1Kの部屋。ユメは引越してきたばかりで、

テレビ・ベッド・冷蔵庫など業者がやってくれたものが揃っているが、

食器・雑貨はまだダンボールにしまったままである。

ユメは「荷ほどきを手伝って欲しい」とリリを部屋に招く。
遠くの方で声が二人の声が聞こえる。

ユメ、玄関のドアを開ける。

ユメ「さあ、入って入って」

リリ「おじゃまします。」

（玄関に飾ってある花瓶をみて）かわいいね、花」

ユメ「いいでしょ？ 駅前のお花屋さんで買ってみたの」

リリ「ちゃんと水あげなきゃだめだよ？」

ユメ「わかってる」

リリ「ほんとに？」

二人、扉を開けて部屋に入ってくる。

ユメ「ほんと！ もう、子供扱いして」

リリ「心配なの」

ユメ「私、バイトだって始めたんだから……。」

はい、ここが私の部屋です」

リリ「おー、……ごちゃごちゃしてない」

ユメ「綺麗って言ってよ」

リリ「ほら、実家の部屋知ってるからさ。新鮮。

ユメが一人暮らしなあ」

ユメ「リリだって、もうしてるじゃん」

リリ「私は実家でも家事ちゃんとしてたけどさ。

大丈夫？ 自炊とか」

ユメ「別に、外で買うからいいもん」

リリ「栄養偏る」

ユメ「じゃあ作りに来て」

リリ「有料になります」

ユメ「えー、なんでー。

（まだ言い慣れてない様子で）カノジョなのにな？」

リリ「んー。……たまになら」

ユメ「やった」

ユメ、ソファアへ移動。

リリ「（部屋を見渡して）ねえ、私さ、今日片付けで呼ばれたんだよね？」

ユメ「そうだよー」

リリ「特に、やることない気が：十分片付いているし」

ユメ「そこにダンボールあるでしょ？

仕分け手伝って欲しくて。

あんまり確認しないで入れてきたから」

リリ「てっきり私、何か組み立てたりするかと」

ユメ「あ、お茶飲む？」

リリ「え、あ、うん」

リリ、ソファアへ移動。

ユメ、ペットボトルを開けてお茶を注いで行く。

リリ「あ、このコップ、ユメがよく使ってるやつ」
ユメ「そうそう。はい」
リリ「ありがとう」

リリ、コップのお茶を軽く飲む。

ユメ「リリが飲む用のコップも買わなきゃね」

リリ「私の家から何か持ってくる？」

ユメ「せっかくだから、新しいのもいいよね。」

お揃いのとか！」

リリ「なんか一緒に住みたい」

ユメ「私は、一緒に住んでもよかったんだけど？」

リリ「それは、難しかったよ。」

家族になんて言えいいのか」

ユメ「えー、そうかなあ。」

『ユメと一緒に部屋に住むんだ！』って言えば、
わかってくれると思うけど？

幼なじみなんだし」

リリ「幼なじみは万能じゃないよ。」

もう大学生なんだしさ」

ユメ「そうだよねー。」

やっと、大学生になれたんだもんねー」

ユメ、腕を絡めてくつつく。

リリ「ちょ、ちょっと！」

ユメ「なに？」

リリ「くつつきすぎじゃない？」

ユメ「えー、そうかなあ？」

リリ「顔、近い…。」

さっきお昼食べたばかり」

ユメ「気にしない気にしない」

ユメ「（髪の毛の匂いを嗅ぐアドリブ）くんくん。

リリのにおい…：すき…。」

リリ「も、もう、ほら！ 片付け！ 片付けしよ！」

ユメ「ああー！」

もうちょっと、ゆっくりしようよ」

リリ「やることやったらね！」

ダンボール、あけるよ？」

リリ、近くにある段ボールを開ける。

ユメ「（不満そうに）ん〜」

リリ「ユメが手伝って、って言ったんでしょ？」

ダンボールの中には、

実家のユメの部屋にあった本、アルバム、照明、置物などが入っている。

リリ「わ〜！ 懐かしい！」

ユメの部屋、思い出すなあ」

ユメ「結構遊びにきてたでしょ」

リリ「高三の時は、受験勉強でほぼ行かなかったし。

あ、この漫画、昔、貸して貰ったなあ」

リリ、嬉しそうにダンボールの中を物色していく。

その様子に対し、ユメは少し冷めた様子である。

リリ「ざっと見たところ、本と小物が多いね。

これ全部出す？」

ユメ「まあ、とりあえずは」

リリ「何処においたらいいかな」

ユメ「んー……」

リリ「この辺りとかは？」

リリ、ぬいぐるみが飾ってあるところまで近づく。

リリ「ぬいぐるみ置いてあるし、

置物系は並べたら見栄えよさそうじゃない？

で、本のスペースは……」

ユメ、リリに近づいて背中から抱きしめる。

リリ「ユメ、どうしたの？

今日、なんか……」

ユメ「……ここまで、我慢したんだよ？

いっぱい、我慢した」

リリ「ユメ……？」

ユメ「付き合うのは、大学生になってからって約束、ずっと守ってきた。

もう、いいでしょ？ 恋人らしいことしても。

リリ。ここが何処だかわかる？」

リリ「ユメの家……」

ユメ「違うよ。彼女の家だよ。

こっちむいて」

ユメ、リリに抱きつく。

ユメ「二人っきりになれたのに。

私だけ意識してるなんて、そんなのずるい」

リリ「……違う。私だって、ドキドキはしてたよ。

でも、片付けが……」

ユメ「にぶい。にぶちん。にぶりり。

はじめて、部屋に呼んだんだよ？

もう幼なじみじゃない、恋人同士なんだよ？」

リリ「……うん。そうだよね」

ユメ「（愛しそうに呼ぶ）リリ……」

リリ「ユメ……」

ユメ「……んー？

キス、しないの？」

リリ「え」

ユメ「いま、するタイミング」

リリ「え、あ、その……」

あ、あゝ、ちょ、ちょっとごめん！

お手洗い行ってくるね！」

ユメ「え、あ……」

リリ、部屋から出ていく。

一人になったユメ。独り言をつぶやく。

ユメ「露骨に避けられた……」

……急すぎたかな。

でもさ、リリからはきてくれないもん」

ユメ「私から行かないと。

このままじゃ、幼馴染のままになっちゃう」

ユメ「……（ため息）はあ。

出会った時から、恋人だったらよかったなあ」

ユメ、ぬいぐるみを抱きしめる。

ユメ「私は、もっと触れたい。

……触れたいよ。リリ」

【Scene02：きみの知らない庭 -植物視点-】

▼喫茶店・テラス（昼）

・喫茶店に飾られている観葉植物の視点

Scene01 の次の日。

リリは、ユメのバイト先に顔を出すことに。

その喫茶店は庭付きの自然あふれるカフェ。

風で木々が揺れる音、鳥の声を聞きながら、

ユメがくるのを待つ。

リリ「（見渡してぼそっと独り言）おしゃれなカフェ……」

リリの席に、ユメがやってくる。

ユメ「（気付いてない）いらっしやいませ。

ご注文はお決まりでしょうか……。

（リリに気付いて大声で）って、ええっ！ うそ！ なんで！」

リリ「しーっ！ 声、おおきい」

ユメ「あっ、ごめん……」

リリ「約束まで時間あったからきてみた」

ユメ「くるなら言っつてよー、あー、びっくりした」

リリ「制服、ヒラヒラしてて可愛い」

ユメ「そうなの！ かわいいでしょ？

この制服着たくて、バイト先ここにしたの」

リリ「似合ってる。

そういう女の子らしい服着こなせちゃうのがユメだね」

ユメ「リリも似合うと思うけど？」

リリ「私は無理無理。顔の系統が違うって」

ユメ「そうかなあ？」

リリ「ほら、注文は？」

ユメ「ああ、そうだった。」

（かしこまる演技で）何になさいますか？ お客様

リリ「どうしようかな。」

店員さんのオススメは？」

ユメ「んー、たとえば…『アレ』とか？」

リリ「『アレ』、とは？」

ユメ「『アレ』でございます。」

お客様が好きなものです」

リリ「…よく私の好きなものわかりますね？」

ユメ「優秀ですから」

リリ「ふむ。では、店員さんを信じましょう」

ユメ「それより私、もう少しでバイトが終わりますので、
あとで一緒にしても？」

リリ「よろこんで」

ユメ、リリの席から離れていく。

リリ、小さな声で独り言を呟く。

リリ「…大丈夫そう、だったかな？」

この前こと」

リリ「はあ…。私の馬鹿」

リリ「どうして、ああいう雰囲気になると、
恥ずかしくなっちゃうんだろっかなあ。

……恋人になるって大変」

遠くの方でユメが談笑している声が聞こえる。

ユメ「(バイト仲間と話して) ふふっ、ちょっとやめてー。
ふふっ、ねえって!」

リリ「(ぼそっと) ……楽しそう」

ユメ、リリの元にドリンクを持ってくる。

ユメ「お待たせしましたー。

『アレ』でございます」

リリ「あー、なるほど!」

ユメ「どうでしょう?」

リリ「さすが優秀な店員さん、お見事」

ユメ「ふふっ、伝票、ここに置いておくね」

リリ「うん。

：なんか、仲良さそうだね」

ユメ「え?」

リリ「バイトの子たちと」

ユメ「そう、年近い子が多くて。

ごめん、あとちょっと待ってて」

リリ「全然、焦らなくていいよ」

ユメ、リリの席から離れていく。

ユメ「(バイト仲間と話して) はーい。
もう、わかってるって」

ユメ、リリの席から離れていく。

リリ、ドリンクを飲む。

リリ「（息を吐いて）ふうー……。
本でも読も」

リリ、鞆から本を取り出し、読書をする。
しばらくすると、ユメがやってくる。

ユメ「お待たせ！

結構、待たせちゃった？」

リリ「ううん、大丈夫」

椅子を引いて着席するユメ。

ユメ「何読んでたの？」

リリ「火曜の二限で紹介してた本」

ユメ「さすが、まじめ」

リリ「面白そうだったから。」

いつからバイト始めたんだっけ？」

ユメ「最近、二週間くらい前？」

リリ「すごい馴染んでる」

ユメ「人と仲良くなるのは得意だからね」

リリ「へえ。上手くやってるんだ」

ユメ「どう？ 安心した？」

バイトしてる姿みて。

ちゃんと働けてたでしょ？」

リリ「そうだね」

ユメ「なんか、素っ気ない反応」

リリ「別に。よかったと思うよ？」

ユメ「ほんとに、そう思ってる？」

リリ「思ってるって」

ユメ「あのさ……。」

もしかして、気にしてる？」

リリ「え？」

ユメ「私が、その、この間ちょっと、

アプローチし過ぎたこと」

リリ「あ、いや、そんな……」

ユメ「ごめん」

リリ「私こそ、ごめん。」

まだ色々慣れてなくて。

でも、私も変わっていききたいと思ってるから。

ユメを見習って」

ユメ「……」

リリ「……私、今のままだやダメなんだって思った。

ユメ、可愛いから、

グズグズしてたら他の人に口説かれちゃうと思ったし」

ユメ「何の話？」

リリ「ほら、仲良く喋ってたじゃん。あれみて……」

ユメ「……え、もしかして、嫉妬した？」

リリ「……」

ユメ「嫉妬？」

リリ「……うるさい」

ユメ「（歓喜して）えー！ー！なにそれー！」

リリ「うるさい！うるさい！」

ユメ「いますぐ抱きしめたい。

抱きしめる！」

リリ「もう、違うからあっ！」

リリ、激しくリアクションしたせいで、

ドリンクをこぼしてしまう。

リリ「あ……」

ユメ「（吹き出して）ぷっ、はははっ！

あーあ、こぼしちゃってー」

リリ「（落ち込んで）うわあー！

この服、最近買ったばっかなのに」

ユメ「拭くものあるよ」

リリ「ごめん、ありがとう」

リリ、ユメからハンカチを受け取って拭いていく。

リリ「あーあ、よりによって、白着てるときに……。

バチが当たったなあ」

ユメ「大丈夫大丈夫。すぐ洗えばシミにならないから」

リリ「……着替えたい」

ユメ「じゃあこの後、服でも買いに行く？」

リリ「それもいいけど……

あ、でも、いや……。

一回うち戻ろうかなあ」

ユメ「そう？」

リリ「……うち、くる？」

ユメ「えー！ いいの？」

リリ「この前、ユメの家も行かせてもらったし、

そのお返しというか」

ユメ「いきたい！

あ、でも、私、彼女の家のつもりでいくけど？」

リリ「……うん、一応そのつもり」

ユメ「え……？ （嬉しそうに）えー！

あ、ちょ、ちょっと、

別にそんな、無理しなくても」

リリ「無理はしてない」

ユメ「じゃあ、期待しちゃうよ？

キスも、その先も」

リリ「……待って。」

えっちなことはなしね」

ユメ「（とぼけて）え？ なに？」

リリ「えっちなことはなし！」

ユメ「えー！」

リリ「急にそこまでは無理！」

ユメ「いずれするんだよ？

変わっていくチャンス！」

リリ「良いように言わない」

ユメ「大人の階段登ろうよ」

リリ「ほら、いくよ！」

ユメ「はーい」

リリ、ユメ、席から立ちその場を立ち去る。

【Scene03：はだかのこころ - お風呂のアヒル視点 -】

▼リリの家・お風呂

・風呂場に浮いているアヒル視点

リリの家に遊びにきたユメ。

おうちデートをして、お泊まりをすることに。

先にお風呂に入るリリ。

湯船に浸かってゆっくりしている。

リリ「（息を吐いて）ふう……」

浴室の扉が開いて、ユメが入ってくる。

リリ「（きづいて）ん？」

ユメ「お邪魔しまあーす」

リリ「え、ち、ちょっと!」

ユメ「ふふっ」

リリ「何、勝手に入ってきてるの!」

ユメ「だって、お泊まりするってことは、

一緒にお風呂入るってことでしょ？」

リリ「違う!」

「というか本当に泊まっていく気？」

ユメ「まあまあ。リリ、落ち着いて」

リリ「落ち着いてる! あっ!」

ユメ「失礼しまーす」

ユメ、湯船に入ってくる。

ユメとリリ、隣に並んで風呂に入る。

ユメ「はああ……気持ちいい」

リリ「もう……。狭いよ」

ユメ「うん、ぎゅうぎゅうだね」

リリ「結局、シーズン1全部見ちゃったね」

ユメ「あれは途中でやめられないよ」

リリ「ね。止められなかった。」

気づいたら、外、真っ暗でびっくりしたよ。

時間経つの早い」

ユメ「リリと一緒にいる時はいつもそうだよ」

リリ「私たち、仲良すぎ」

ユメ「ずっと一緒にいるもんね」

リリ「……ユメとお風呂に入るなんて、

何年ぶりだろう」

ユメ「小学生以来？」

リリ「中学の最初の方も入ってなかった？」

ユメ「そうだったかも。」

あの頃は、毎日お互いの家、行き来してたよね。

リリが部活で忙しくなってから、遊ぶ回数減っちゃったけど」

リリ「それでも十分遊んでたよ？」

ユメ「でも、減ったのは事実でしょ。」

私、一時期、部活なんてやめちゃばいいのに、って思ってた」

リリ「えー？」

ユメ「寂しかったの。」

部活で、楽しそうにしてたから」

リリ「あー。」

それは今日、私がユメのバイト先で抱いた感情と同じだ」

ユメ「ふふふっ、おかしい。

私たち、嫉妬し合ってる」

リリ「私のは、嫉妬じゃないけど」

ユメ「はいはい」

リリ「ユメ、髪の毛さらさら。

癖なくて羨ましい」

ユメ「その分、お金かけてるからねえ。

伸ばしてる方が、持つてる服に合うし。

だけどケアは大変なのよねえ」

リリ「あー…」

ユメ「わかるでしょ？ リリも。

伸ばし始めたから」

リリ「そうだね」

ユメ「…髪、ずいぶん伸びたよねー」

リリ「ああ、うん。

いまだに鏡見るとびっくりする」

ユメ「ずっと短かったもんね」

リリ「うちの部、厳しかったからさ」

ユメ「…大学では、本当にバスケやらないの？」

リリ「中高で思いっきりやったから。

大学では新しいことやろっかなって。

話したよね？」

ユメ「うん、サークル見つきりそ？」

リリ「んー、ユメと見学行った登山サークルは、

気になってるけど」

ユメ「雰囲気いい感じだったよね。

私は、体力ないから絶対無理」

リリ「そういうユメは？ サークル」

ユメ「今はバイトで手一杯だなあ。

それよりも、リリといっぱいお出かけしたい」

リリ「それは、しよう」

ユメ「身体、もう洗った？」

リリ「うん」

ユメ「そっかー。じゃあ、洗って？」

リリ「じゃあってなに？」

ユメ「いいでしょ？」

昔よくしたじゃん、洗いっこ」

リリ「いや、恥ずかしいよ、もう……。

私、先上がってるから。

ゆっくり入りなよ」

ユメ「……やだ」

リリ「……え」

ユメ「……そういの、嫌」

リリ「そういのって……？」

ユメ「……（小声で）触って欲しい」

リリ「え？」

ユメ「洗うのとか本当はどうでもいい。触って欲しいの！」

リリ「え、え、……えっち！」

ユメ「子供みたいなこと言わないで！

好きな人には触りたいし、触って欲しいの、私は！」

ユメ、リリに身体を寄せる。

リリ「ち、ちょっと！ ユメー？」

ユメ「……リリ。聞こえるでしょ？ 私の心臓の音」

リリ「……う、うん」

ユメ「……こんなにドキドキしてる」

リリ「……」

ユメ「……慣れないのはわかるよ？

だけど私、本気だよ。

今は無理でも、いつかは……（小声で）えっちなことだってしたい」

リリ「……」

ユメ「って！ 伝えておきますね！」

リリ「は、はい！」

わ、わかりました！

……私も、その……よろしくお願いします？」

ユメ「（吹き出して）ぷっ、なにそれ？」

リリ「いや、その……あー。

私も、いつかは……。

ごめん、私のせいで困ってるよね」

ユメ「……困ってます。

困りすぎて、好き」

リリ「……ううっ、私、頑張るから、頑張る。

もうちょっと待ってて」

ユメ「わかってるよ」

リリ「私も、ユメと恋人になっていきたい。なりたいの。

だから、変わりたい。

……だけど、ダメかも、全然」

ユメ「リリ？」

リリ「……ごめん。私、今日、ちょっと、強がっちゃったみたい。

私、正直にいうと、変わって、今までの関係がなくなるのが怖い。

……怖い」

ユメ「……そっか」

リリ「……こんな場所でごめん」

ユメ「とりあえず、お風呂上がったなら、もうちょっと話そう」

リリ「…わかった」

ユメ「そうだなあ……。」

アイスでも、買いにいこっか」

リリ「……うん」

【Scene04：違うふたり 同じきもち -小瓶視点-】

▼海に見える砂浜

・砂浜に落ちている小瓶の視点。

ユメ、リリのそばに近づいていく。

ユメ「この景色は変わらないね。

……だからかな。海を眺めていると落ち着く」

リリ「私も、悩んだときはよくここにきてた」

ユメ「ひとり黄昏（たそがれ）てるリリ、高校の時よくみた」

リリ「やめてよ。

ユメより私、勉強できなかったし」

ユメ「そう？」

リリ「そうだよ」

ユメ「リリは、よく私と比較するよね。どうして？」

リリ「……色々と、理由はあるけど。

一番は、ユメのことが好きだから」

ユメ「好き……？」

リリ「……これは初めて言うけど、

私、ずっとユメみたいな女の子になりたいなって思ってた」

ユメ「え、私に？」

リリ「うん、憧れてたんだ。

ピンクやレースのついた服が似合って、肌が綺麗で。

見た目も可愛いのに、自分の意見もしっかりあって。

どれも、私には持っていないものだったから」

ユメ「そんな、私は憧れる程の人じゃないって」

リリ「髪伸ばし始めたのも、ユメの影響って言ったら？」

ユメ「嘘！」

リリ「嘘。でも半分本当」

ユメ「それどっち？」

リリ「どっちも」

ユメ「答えになってない」

リリ「とにかくさ、私の中でユメの存在は大きいんだ。

だから、ユメとの関係は大事にしていきたいと思ってる」

ユメ「……そう」

リリ「うん」

ユメ「……やっぱり、にぶい。にぶちん。にぶりり。」

リリ「え？」

ユメ「私も同じ気持ちだよ。

もっと、好きを伝えたいの。

もっと、私がリリの事どれだけ好きかわかって欲しいし、

もっと、リリからの好きが欲しいの。

だから……。

あー、もう、言葉が出てこない」

リリ「……」

ユメ「そっち、いつでもいい？」

リリ「……うん」

ユメ、リリのそばに近づいていく。

ユメ「……くつつくのは嫌？」

リリ「嫌じゃない。嬉しい」

ユメ「よかった」

リリ「……ドキドキする。恐ろしいほど」

ユメ「（笑って）その表現、何？」

リリ「……怖かった。」

ユメに触れられて、おかしくなりそうになる自分が。

この先、これ以上のことしたら、どうなっちゃうんだろうって」

ユメ「どうなっちゃってもいいよ、リリと一緒になら」

リリ「……どうにかなっても、嫌いにならない？」

ユメ「もう、見縊（みくび）らないで！

こんなに好きって言ってるのに」

リリ「ご、ごめん」

ユメ「さっき、懂れてるって言われた時、

私もリリの好きなところ、いっぱい言おうと思った。

けど、やめた。どうしてかわかる？」

ユメ、瓶の方に歩いていく。

リリ「……」

ユメ「私はね、リリがリリだから好きなの。

どこがとかじゃないの。

リリのいない世界なんて、考えられない。

それだけはずっと、変わらないよ」

リリ「……ユメ」

ユメ、リリにキスをする。

リリ「……キス」

ユメ「しっちゃったね」

リリ「……すごい」

ユメ「なにが？」

リリ「……世界がキラキラして、泣きそう」

ユメ「というか、泣いてる！ 涙出てるよ！」

リリ「うん、泣いてる」

ユメ「ふふふっ」

リリ「……キスって、こんなに嬉しいものなんだね」

ユメ「もう知らない世界には戻れないでしょ？」

……あっ」

リリ、ユメにキスをする。

リリ「……うん。戻れない」

間。

リリ「……思ったんだけど」

ユメ「なに？」

リリ「変わるもの、変わらないもの。

二つあっていいんだね」

ユメ「そうだよ。

どっちも必要なの。

どちらかだけじゃダメ。

二つあるのが重要」

リリ「そっか。単純なことだった。

……極端に考えすぎてた」

ユメ「私も、焦ってるところあったかも」

リリ「恋愛初心者だ、私たち」

ユメ「でも、一緒に悩めてよかった。

……ねえ、こういうやりとりってさ」

リリ「カップルみたい」

ユメ・リリ「ふふふっ（笑う）」

リリ「あ！」

ユメ「なに？」

リリ「アイス」

ユメ「あー！ 待って待って！」

ユメ、袋の中のアイスを確認する。

アイスはカップ形状のものを想定。

リリ「どう？」

ユメ「溶けてる…」

リリ「でも、冷凍庫に入れたらなんとかなるかも」

ユメ「帰ってすぐ入れよ」

リリ「そうしょ」

ユメとリリ、立ち上がる。（袋を持って）

そして歩き始める。会話が段々遠ざかっていく。

ユメ「今日、同じベッドで寝てもいい？」

リリ「え？ そのつもりだったけど…。

あ、でも」

ユメ「わかってる。えっちなことはしない」

リリ「ほんとに？」

ユメ「ほんとほんと」

リリ「ほんとに？」

ユメ「ほんとほんとほんと！」

リリ「…ちょっとだけなら」

ユメ「え！」

リリ「…やっぱなし」

ユメ「なんでよー」

【Scene05：スイート・ドリーム-ぬいぐるみ視点-】

▼リリの部屋・ベッド

・リリの部屋にある「ぬいぐるみ」の視点。

ユメ「ふふふっ」

リリ「何？ 笑って」

ユメ「……リリの匂いがする、枕」

リリ「ねえー」

ユメ「(枕に顔を押し付けて) んんゝゝゝー」

リリ「ちょっと、やめてよ！

ヘンタイっぽい」

ユメ「ヘンタイじゃダメ？」

リリ「ダメです。ほら、寝るよ」

ユメに背中を向けて寝る体勢をとるリリ。

少し間があって

ユメ「……ねえ」

リリ「ん？」

ユメ「(ちよっと笑いながら) ……ヘンタイじゃダメ？」

リリ「ダメだって」

ユメ「ふふふふっ。

じゃあ…… (少しためてから)

ぎゅ、ってしてもいい？」

リリ「……うん」

ユメ、リリの後ろからハグして

ユメ「……ふふふっ、あったかい」

リリ「……」

ユメ「……不思議だよね。」

くっついてるだけなのに、

なんでこんなに、幸せな気持ちになるんだろ」

リリ「そうだね」

リリ、身体を動かして、ユメの方向を向いて抱きしめて

リリ「……私も、抱きしめたい」

ユメ「……いーよ」

間。

ユメ「（寝息を立てる）」

リリ「（呼びかけて）……ユメ。」

（確認して）……寝ちゃった。

（キスをして）……ちゅっ。

……おやすみ」

【 Bonus : 愛してるゲームを観察する「ぬいぐるみ視点」】

▼ユメの部屋（昼）

- ・ユメの部屋にある「ぬいぐるみ」の視点。

リリは本読んでいる。

ユメ「ねえ」

リリ「ん？」

ユメ「ねえ、ねえ」

リリ「なに？」

リリ、ユメに視線を送る。

ユメ「……『愛してる』」

リリ「（ちよっとびっくりして）……ありがとう」

ユメ「ほら、返して？」

リリ「私も好きだよ？」

ユメ「違う！『愛してる』！」

リリ「……愛してる」

ユメ「（すぐ）愛してる！」

リリ「（笑って）ふふふっ、もう、なに？いきなり」

ユメ「はい、笑った！

リリの負け！」

リリ「負けて何よ？

こっちは本読んでたんですけどー？」

ユメ「それは一旦置いて」

リリ「はい」

ユメ「愛してるゲーム、やろ」

リリ「え？ ああ、あの、

お互いに向かい合って交互に『愛している』と、色んなパターンやシチュエーションで伝え合い、

照れたり笑ったりしたほうが負けというゲームだね」

ユメ「説明ありがとう。」

早速やろ！」

リリ「私、本の続き読みたいんだけど…」

ユメ「勝ったら続き読んでいいよ！」

リリ「負けたら？」

ユメ「ちゅーして？」

リリ「勝ったら現状維持で、負けたらご褒美……。」

微妙に緊張感がない」

ユメ「んー、じゃあリリが勝ったら、

私に好きなことお願いしていいよ？」

リリ「……やる」

ユメ「よし、決まり！

三本勝負ね！」

ユメ、リリ、移動してぬいぐるみの近くに来る。

ユメ「準備はいい？」

ゲームスタート！」

リリ「……」

ユメ「……」

リリ「これ、どっちから言う？」

ユメ「あ、（ちょっと笑って）え、じゃあ私から！

（軽く）……愛してる」

リリ「（フラットに）愛してる」

ユメ「(可愛く)愛してる!」

リリ「(しつとりと)……愛してる」

ユメ「(にやっとするのを堪えながら)愛してる!」

リリ「(近づいて、もう一度真剣に)愛してる」

ユメ「(堪えていた笑いが漏れる)ふふふっ」

リリ「あ、笑った」

ユメ「ふふふっ、そんな真剣に言われたらずるいよ!」

リリ「そういうゲームでしょ?」

ユメ「余裕ぶって……」

普段そういうの、恥ずかしがるくせに」

リリ「勝負となれば話は別」

ユメ「じゃあ、次はリリから!」

リリ「はい。」

(一呼吸おいて)スタート。

……愛してる」

ユメ「(堪えて)んー」

リリ「あれ、今?」

ユメ「笑ってない。」

……ねえねえ、こっちきて?」

リリ「……」

ユメ「きて?」

ユメ、リリを抱きしめて

ユメ「はい、ぎゅー……」

(耳元でゆっくり)愛してるっ」

リリ「ぷふっ」

ユメ「はい、私の勝ちー!」

リリ「ねえ、ちょっと今のずるくない?」

ユメ「愛してる、って言いさえすれば、なんでもありなんだよー？」
リリ「あー、そういう……。」

わかった。もう遠慮しないからー！」

ユメ「これで最後。スタート！」

（耳元で）愛してる」

リリ「（耳元で）愛してる」

ユメ「愛してる」

リリ「愛してる」

ユメ「……愛してるっ」

リリ「……愛してる」

ユメ「愛してる」

リリ「愛してる」

ユメ「（色っぽく）愛してる」

リリ「（なんとか堪えて）んー。」

（深呼吸する）すうう……はあ……。

ユメ、私、本当に、心の底から……」

ユメ「……」

リリ「あいしてーるっ！」

リリ、ユメを勢いでくすぐる！

ユメ「え！ ちょ、ちょっとー！

ふふふふっ、はははっ！……」

リリ「（くすぐりながら）はい勝ったー！……」

ユメ「ふふふっ、もおー！ ずるいずるいー！」

リリ「なんでもありって言ったのはユメだよ？」

ユメ「『愛してる』で笑わせてないじゃん！

ルール違反！」

リリ「あ、それはそうか」

ユメ「じゃあ私の勝ちでいい？ いい？」

リリ「まあ、いいか」

ユメ「それじゃ約束通り。」

ちゅーして？」

リリ「いいけど……。」

（小さい声で）私、勝ったら、ちゅーして貰おうと思ってた」

ユメ「え、なにそれー！」

（小さい声で）かわいい」

ユメ、リリにキスをする。

リリ「ユメ……」

ユメ「……えへへ、こんどは私にして？」

リリ「……う、うん」

リリ、ユメにキスをする。

ユメ「ふふふっ、愛してる！」

リリ「私も。愛してる」

ユメ・リリ「ふふふっ」